

四旬節第3主日 ヨハネ 4：5～15,19b～26,39a,40～42

簡単に福音の背景を説明します。井戸は、旧約聖書の中では、伴侶(パートナー)に出会う場所として度々登場しています。アブラハムのしもべ(イサクの代理)、ヤコブ、モーセが伴侶と井戸で出会っています。今日の場面では個人的な問題を抱える女性が「生きた水」、イエス様に出会う設定になっています。

「水」(ウォーター)を汲みに来た女性に、イエス様は、別の「水」=「生きた水」の話をします。イエス様は「生きた水」に2つの意味を込めています。1つは「復活前の自分」、もう一つは「復活後に遣わされる聖霊」です。その違いは、日本語には訳されていませんが、原文のギリシア語では現在形と未来形に使い分けられています。現在形の「生きた水」はイエス様ご自身を、未来形では「もう一人の自分(別の弁護者)である聖霊」です。

「生きた水」とは、「本物に巡り会いたい」私たちの願いです。サマリアの女もそうでしたが、私たちは「苦しい時」「悲しい時」体験の中で「本物」を探そうとしています。「私も生きた水が欲しい」と憧れました。「信仰をどう生きたらいいのか?」「心が満たされる生き方はどこにあるんだろう?」と憧れました。「生きた水」を頂いたように感じたのはイグナチオの霊操にある“原理と基礎(#23)”です。

「人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうすることによって、自分の靈魂を救うためである」

この言葉は、生きる目的を変えてくれました。生きる目的は「会社の利益」「自分の出世」のためではなくて「自分の魂を救うためだ」と教えてくれました。今までつぎ込んできた仕事へのエネルギーが、色あせたように感じました。行き詰ったように感じていたサラリーマン生活のまだ先があるように感じました。この言葉に刺激されてイエズス会に入ったように思います。それ以来、召し出しで迷った時に、“原理と基礎”に立ち返ってきました。「生きた水」は、私を支え続けてくれます。イエズス会員として生きる原動力になっています。

「生きた水」は、信徒の皆さんにとって「生きる目的」かもしれません。一方的にもらえるものではなく、目的に向かって情熱を傾ける中で、折に触れていただけのものなのでしょう。

もう一つの「生きた水(聖霊)」について一言お話しします。逆説的ですが、「イエス様がこの世を去って行かれてはじめて私たちの渇きが満たされる」という解釈があります。イエス様を人間的にだけ理解すると、去っていくことは大きなつまずき、残念なことです。けれども、復活されたイエス様は新しい形(聖霊)で存在します。聖霊の賜物のおかげで、私たちはみ国を求めるイエス様の熱意を生きることができます。私たちは、イエス様の死と復活を体験して霊的な糧をいただけます。何気ない日常の中に隠されている神様の思い、「生きた水」を発見できます。

「生きた水」の2つの意味を考えながら四旬節を過ごしましょう。